

第 37 回土木計画学研究発表会(春大会)：2008.6.6~7(北海道大学)
 企画論文部門，若手研究者論文部門 セッション討議内容の記録

セッション名：自転車交通の特性と評価	
日付： 6月 6日 (金)曜日，セッション時間：10:15～11:45	
オーガナイザー・司会者名(所属)：山中英生(徳島大学)	
討 議 内 容	<p>セッション全体：本セッションでは、自転車の行動特性、走行環境評価に関する5件の研究発表があった。いずれも国内外での調査や計測結果に基づいた研究で、空間評価の視点としては、共存性、快適性、心理的ストレスに着目したもの、自転車の特性については、電動自転車を含む混在交通流と交通容量との関連に着目したものと移動軌跡データを用いた短距離トリップの特性に着目したものがあつた。会場からは計測・調査技術やその評価方法に関する質問があり、積極的な討議がなされた。</p>
	<p>(発表番号) 発表者名(所属)：(143) 金利昭(茨城大学)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シートの評価者は誰か？/目標値があれば評価ははっきりするのではないか？(近藤先生・滋賀県立大学)/今回は専門家が評価することを想定(発表者)/評価する人は本来専門家で英国の安全監査のような似たものがある(元田先生・岩手県立大学)/オーストラリアのものは一般を対象としたもので、専門家が使う点数化して行うものもある(吉田先生・大阪市立大学) ・道の評価単位は？(近藤先生・滋賀県立大学)/今回は統一した基準は用いていない(発表者)
	<p>(発表番号) 発表者名(所属)：(144) 柿原 健佑(徳島大学大学院)：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中国ではどんな電動自転車か？(金先生・茨城大学)/加速性能が普通の自転車より良く、速度は25km～35km。シェアは5割程度を占めている(山中先生・徳島大学)
	<p>(発表番号) 発表者名(所属)：(145) 諸田 恵士(国土技術政策総合研究所)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・閾値の作成に当たり、アンケートを用いた通行快適性の評価だけで可能か？多面的に検討が必要では？(屋井先生・東京工業大学)/共存で安心・快適というわけではなく、実験による対応も含めて、多面的な検討が必要だと考えている(発表者)/こういう指標を是非作ってほしい。海外に類似例がないか調べてみてはどうか？進行方向が関係しているのではないか？(元田先生・岩手県立大学)
	<p>(発表番号) 発表者名(所属)：(146) 竹林 弘晃(株式会社建設技術研究所)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歩行者にトランスミッタを装着して調査を実施したか。実施していないのであれば、歩行者のストレスも評価してはどうか。(大森氏・日建設計シビル)/道路の空間評価を行う上では、自転車だけでなく道路利用者である歩行者や自動車の評価は、必要と認識している。この論文では、歩行者については分析していないが、今回の調査で日常時も計測しておりその結果を使えば整理できる。また、自動車の運転手に対しても調査したが、自転車よりも自動車は性格等により影響する要素が大きく、ストレス状況が想定したような結果にならなかった。 ・飛び出し等の多い交差点付近等の車道を走行する際、ストレス値への反応があつたか。(大森氏・日建設計シビル)/今回の調査路線は、そうした箇所が少なく、調査手法上、大きな交差点では野帳を記入していたため、特徴的な結果はでなかった、特にストレス発現が大きかったのは、地下道の走行、大きな路面の凹凸の部分であつた。(発表者) ・どのような人を調査員として、どのくらいのサンプルを取得すれば妥当な評価とできるか。(山

中先生) / 個人の性格とストレス発現状況との関連性を分析した結果、性格とストレス発現の関連性が伺え、ストレスを発現しやすい人を調査員にする方がより感度の高いデータが得られると考える。より精度の高い調査とするには、今後、多様な道路断面形状でのデータの蓄積や調査手法の課題を改善する必要があると考える。(発表者)

- ・ ストレスと健康の関係性は見いだせるか。(蕃さん・徳島大学) / この計測機器を用いて健康の視点から評価をすることは難しい。(発表者)

(発表番号) 発表者名 (所属) : (147) 藤井 敬士 (東京大学大学院)

- ・ 自転車利用者は車利用者の特性と比較して、一旦家に帰ってくることがあげられているが、その理由には荷物の有無が関係するのでは?(大脇氏・国土技術政策総合研究所) / 今回の調査では荷物の有無まで調査できていないが、関係はあると思う(発表者)

- ・ 図-2 で分担率が安定していないのはデータの取り方なのか?(元田先生・岩手県立大学) / 1000 m単位で集計して分担率を算出しているため、トリップ数が少ないような距離帯では分担率が歪んでしまっていると考えられる(発表者)